

年表 —市田柿に関する主なことから—

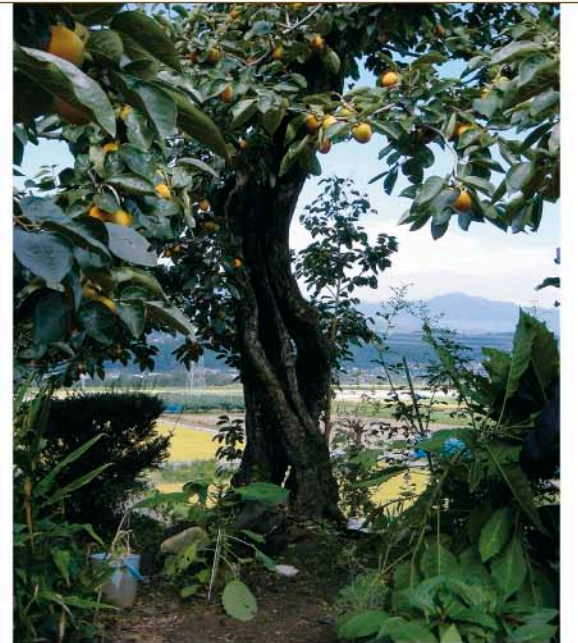
奈良時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	元文年間	文化年間	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代	令和時代
1948	1955年頃 1960年頃	1957 1965 1968 1969	1614 1656	1838 1857	1895 1907年頃	1921	1924 1926	1929 1943	2008	2007
中国から渋柿が伝来	飯田・下伊那地域で渋柿が栽培され、串柿の加工が行われる	松岡氏が、現在の高森町市田に松岡城築城	大坂冬の陣の際に知久則直が各武将へ串柿を贈る 飯田城主脇坂安元が柿改を行う 立石柿が「將軍の齒堅め」の儀式に用いられ、年末の風物詩として江戸で人気に	立石寺に「立石柿出荷天竜川通船絵馬」が奉納される 下市田で伊勢講がさかんになり伊勢社が祀られる 伊勢屋敷で寺子屋を開き、焼柿を村内に広めた児島礼順死去	伊那郡立農事試験場開設（1903年廃止） 上沼正雄が寺山の斜面を開墾し焼柿の苗木を植える	焼柿から市田柿へ改称を申請 上沼正雄、橋都正農夫、酒井安らが下市田区壮年団とともに、市田柿を東京、名古屋、大阪の各市場へ初出荷 宮沢熊太郎が飯田市三穂地区へ市田柿を植える 長野県柿品種調査展覧会開催。市田村の3人が出品した柿が優良品種に選ばれる 長野県立農事試験場伊那分場開設	世界大恐慌。養蚕業が衰退し、果樹栽培への転換が進む 戦争中、女子青年会代表が靖国神社、明治神宮、山階宮家へ市田柿を	献上（1944、1945にも奉献） 県立農業試験場下伊那分場で市田柿の硫黄薫蒸の調査・試験が始まる（1951年まで） 飯田市三穂地区で立石柿に代わり市田柿の栽培・加工がさかんになる 硫黄薫蒸法が普及 セロハン袋を使った出荷形態に統一される 飯田・下伊那地域で生産される干柿のブランド名を「市田柿」に統一 北原利雄がモーター駆動の柿むき機を開発 松川町、豊丘村、農業試験場下伊那分場の市田柿6樹が優良母樹に指定される 出荷形態がセロハン袋150gから200gへ増量される 県立農業試験場下伊那分場移転 樹園地栽培が定着し、品質向上、生産量増加につながる 11月上旬の長雨により青カビが大量に発生 火力乾燥法や消毒法の改良、大型の柿ハウス導入などがすすみ、飯田・下伊那地域が日本有数の干柿産地に成長	市田柿専用の全自動柿むき機「ムッキー」が開発され、広く普及 高森町で「柿を使った料理コンテスト」開催 すべての加工食品に品質保持期限表示が義務付けられ、シーラー機を使った密封包装へ移行 市田柿の衛生管理マニュアルを策定、導入 特許庁の地域ブランドに「市田柿」が認定される 高森町に「市田柿の由来研究委員会」発足 市田柿ブランド推進協議会設立 高森町歴史民俗資料館で特別展「市田柿発祥の里」と時の駅講座「市田柿を生んだ処」とその時代」開催 8月に下伊那郡北部を中心に降雹。落果などの被害が出る	

市田柿コラム

市田柿の古木

江戸時代に伊勢社の境内に生えていた「焼柿の神木」が接ぎ木によって広まっていった市田柿。高森町をはじめ、広い地域に市田柿の古木が残されています。今もなお秋には実が熟し、市田柿に加工されている現役の古木を紹介します。

*各古木の数値は、胴回り（胸高直径）です。



春日家の古木。春日富治が豊丘村へ婿養子に来た際に持ち参り、植えたといわれる。…200cm



宮沢家の古木。宮沢熊太郎の墓のそばに植えられ、飯田市三穂地区に市田柿が広まるきっかけとなった。…180cm



南信農業試験場の古木。昭和50年に試験場が移転する際に、現在の場所に移植された。…120cm



中村まさ子宅の古木。蜂屋柿を台木にして焼柿が接がれているのは珍しい。…130cm



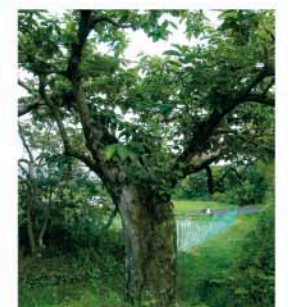
山岸行雄宅の古木…170cm



松岡城址の古木…260cm



上沼長彦宅の古木…200cm



北条達美宅の古木…170cm



橋都家の古木。橋都正農夫は市田柿発展に尽力した功労者の一人。…130cm

【注釈】 松岡城址の柿の古木は立石柿という説もあります。